



太平洋戦争（大東亜戦争）が終わってから今年で78年。記憶がすっかりボケてしまわないうちに、あの頃のことを思い出すままに少し書き留めておきたいと思います。とりとめもない老人の昔話として、気軽にお読みいただければ幸いです。

最初に、やや履歴書風になりますが、私は昭和12（1937）年1月、金子一益・とき夫婦の長

子として、新城市（旧南設楽郡東郷村）川路というところで生まれました。実家は、豊橋駅から飯田線で約1時間。戦国時代に織田・徳川連合軍と武田軍が激突した天正3（1575）年の長篠・設楽原合戦の古戦場のど真ん中にあります。

実家の近くには、合戦で討ち死にした武田方将兵の霊を祭る「信玄塚」や、その首級を洗ったと

伝えられ、いつも不気味に赤茶色に濁った「首洗い池」などがありました（池は現在もありませんが、半分以下に縮小して往時の面影は全くなし）。山紫水明といえは聞こえは良いけれど、昔はイノシシ、猿、熊（私の名前の起源？）などが出てきても不思議ではないような片田舎でした。

生まれた年の9月に、盧溝橋事件があり、日中

戦争（当時は支那事変）が始まりました。真珠湾攻撃をきっかけに日米が開戦した時は約5歳。敗戦の時は8歳半で、東郷東国民学校（当時小学校のことをドイツ風にそう呼んでいた）の3年生でした。

当時は、1学級60人ぐらいいいて、同級生の中には「ダース（12人兄弟）の10番目などという子もいました。戦争目的に奪取されてからは、そこを基地とするB29（大型戦略爆撃機）による本土空襲が本格化し、連日猛烈な空襲に見舞われていました。

しかし、B29は比較的大きな都市を狙っていて、小さな町や村が標的になることはなく、その点では私たちの周辺にはそれほど切迫した危機感はありませんでした。ただ一度だけ、名古屋か豊

橋を爆撃した米軍機が、帰りがけに爆弾を1発、実家に近い八名村の船着山の麓に落とし、赤黒い煙が高く上がったのを覚えています。多分名古屋か豊橋で落とし忘れたのを慌てて落したのでしようが、突然だったのひやっとなりました。

B29は普通1万5千前後の高度を整然と編隊を組んで飛んでくるので、それを必死に迎撃しようと

する日本の戦闘機は手が出ず、あつげなく撃墜されるのを私たちは下から見上げて口惜しがり、切歯扼腕したものです。

ただ実際に怖かったのはB29を護衛しているグラマン戦闘機（日本の近海の航空母艦から発進する小型艦載機）で、B29より低空を飛んでいて、いつ急降下して機銃掃射してくるか分からないので、学校の行き帰りは特に注意が必要でした。当時私たちは毎朝消防署の前に集まって、下級生から順に「列縦隊に並んで軍歌などを歌いながら登校するのですが、途中で「敵機来襲！」の警戒警報、続いて空襲警報のサイレンや半鐘がけたたましく鳴ると皆ハラ

78年前の夏の思い出

ハラに分かれて、山の間に駆け込みます。
(2面に続く)

に奪取されてからは、そこを基地とするB29（大型戦略爆撃機）による本土空襲が本格化し、連日猛烈な空襲に見舞われていました。

しかし、B29は比較的大きな都市を狙っていて、小さな町や村が標的になることはなく、その点では私たちの周辺にはそれほど切迫した危機感はありませんでした。ただ一度だけ、名古屋か豊



B29 (ウィキペディアから)

空襲下の日常生活
「ぜいたくは敵だ！」

そのような日は授業もないので、そのまま山道の木陰に身を隠しながら弁当を食べたり、木に登ったり、小動物を追いかけたり。時には蛇(ヤマカガシやシマヘビなど)を見つけると素手で捕まえて、その場で一気に皮をむき、それを空になつた弁当箱に入れて、家に帰って台所に置いておくと、母や祖母が何も知らずに開けてびっくりするのが面白く、そういった

生きるためのギリギリの線で、肉や魚はめつたに口にしたことなし。なにせ「欲しがりません勝つまでは」「ぜいたくは敵だ！」のご時世で、親や先生からも、「二言目には戦地の兵隊さんの苦労を思え」と言われ、辛抱したものです。たばこ好きの父などは、緑の松葉をゆでてあくを抜き、天日で干したものを古新聞紙などに巻いて吸っていました。人間窮すれば通

感が住んでいた名古屋へ行ききました。名古屋駅に着いてすぐ、空襲警報が鳴り、道端の防空壕(ごう)に避難しましたが、警報が解除されて壕から出た時、遠くに名古屋城の金の鯨(しやちほこ)が目に入りました。その後まもなく5月の大空襲で天守閣が焼失。あれがお城との最初で最後の出会いでした。空襲の激化に伴い、全国的に都会から田舎への疎開が進み、東郷村でも小学校には疎開生徒がかなりの数、おそらく1学年に5〜6人はいたと思

います。飯田線三河東郷駅の近くの勝楽寺(曹洞宗)には名古屋の花ノ木小学校の生徒と先生が約100人集団疎開しており、本堂などで寝起きしていました。飯田線三河東郷駅の近くの勝楽寺(曹洞宗)には名古屋の花ノ木小学校の生徒と先生が約100人集団疎開して

78年前の夏の思い出

ました。人間窮すれば通ずで、大人も子どももいろいろ工夫して耐え生活を送っていたわけですから、

名古屋城の金の鯨を見た

大都市は次々に焼け野原となりました。たとえば、名古屋は、戦争中63回も空襲に見舞われ、死者は8000人に達し、豊橋では死者600人、全焼家屋約1万6000棟(いずれも市のホームページから)。

私も純情な軍国少年だった

同じ頃の思い出をもう一つ。私の実家の隣に住んでいた父方のいとこは、私より20歳くらい年上で、兵卒として旧満州(現中国東北部)や北支

戦線で実際に戦ったことがあるらしく、戦争の初

ただし、日常の食事は、母に連れられて初めて親戚が住んでいた名古屋へ

期、一時帰省した際に戦場の様子を得意げに話してくれましたが、中国人の首を押し切り(農機具)で斬るモノクロ写真を見せられた時には思わずぞっとしました。もちろん、当時の日本兵が中国大陸で実際に何をやったか知る由もありませんが、相当ひどいことをやったらしいことは察しがつきました。こうした断片的な記憶は、80年たった今も鮮明に脳裏に焼きついています。

私の母方のいとこの中には優秀な人もいて、彼らの多くは特攻隊で戦死

たら、多分少年兵として特攻隊に志願し死んでいったような気がします。父は、職業軍人ではありません

その父との思い出で忘れられないのは、終戦わずか1週間前の8月7日の豊川海軍工廠(こうしよく)大空襲のことです。東三河在住の年配者はご存知のように、この大空襲は非常に衝撃的なものでした。ちょうど

ひお読みください。この空襲の時、父は守衛として工廠の正門で勤務していましたが、この正門付近が最も被害が多く、逃げそこなった工員や女生徒の死体が積み重なっていたと聞きました。炎上する工廠から立ち上る黒煙は約30分離れた我が家からも、はっきり見え、夜になると上空は赤々と輝いていました。それを覚えて、てっきり父は死んだものと思い、翌朝一番に母や姉と一緒に遺体を探しに行こうと、深夜握り飯を作りか

かねこくまお
元キャリア外交官。ベトナム戦争の最盛期にサイゴンの日本大使館で勤務し、死線を潜った経験を持つ。環境問題の黎明期に「かけがえのない地球」のスローガンを自ら創案し、環境外交の最先端で活躍。その後第1次石油ショック(1974年)を契機に環境派から原子力推進派へ転向。外務省初代原子力課長、日本国際問題研究所研究局長、外務参事官などを歴任。退官後東海大学教授。現在はエネルギー戦略研究会会長のほか、外交評論家として幅広く活躍中。米ハーバード大学法科大学院卒(LLM)。新城市出身、86歳。



豊川海軍工廠を見学する筆者(昨年12月)

と。本当に幸運というか奇跡的なことでした。もしあの時父が死んでいたら、我が家の生活は大変なことになり、当然私の人生にも重大な影響があっただろうと思います。昨年暮れ、新城市のライオンズクラブでの講演のため帰省した折に、初めて豊川海軍工廠跡(現在は豊川市平和公園)を訪れ、昔の弾薬庫や砲弾を作っていた工場、防空壕などを視察し、往時をしのびました。後日機会があれば、その時のことや、敗戦直後のこと(米兵との最初の出合など)についても色々書いておきたいと考えています。

〈注〉「母さんが中学生だったときに、豊川海軍工廠被爆学徒たちの手記」エフエー出版、1994年